



TITLE:

比較性なき統計的計數

AUTHOR(S):

菊田, 太郎

CITATION:

菊田, 太郎. 比較性なき統計的計數. 經濟論叢 1927, 24(5): 927-931

ISSUE DATE:

1927-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128533>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 五 第

卷四十二第

行發日一月五年二和昭

論 叢

分配論の性質

九州帝國大學
教授 文學博士

高田 保馬

中世の港

教授 文學博士

三浦 周行

勤勉獎勵目的の課税

教授 法學博士

神戶 正雄

純粹國家

助教授 學士

作田 莊一

說 苑

ロッシャーとハーゲル哲學

講師 文學博士

米田 庄太郎

ブルゲン氏の諸社會主義評論

教授 法學博士

田 島 錦治

琉球最後の王朝とベルリ提督

教授 法學博士

山本 美越乃

雜 錄

指數の形式と指數の目的

助教授 經濟學士

蜷川 虎三

比較性なき統計的計數

經濟學士

菊田 太郎

法 令

銀行法・震災手形損失補償公債法・震災手形善後處理法・兌換銀行券整理法・公益質屋法・海外
移住組合法・輸出組織物取締法

比較性なき統計的計數

菊田 太郎

一

社會統計學の目的は、社會大量現象の秩序ある敘述と、社會大量現象間に存在する常例の指摘及び因果關係の究明との、二に大別し得る¹⁾。後の目的を達せんがため用ひられる研究方法は數種あるが、その内最も重要なのは比較法である。然るに比較法は之を適用し得ない場合が頗る多い。その理由は何處に存在するのであらうか。

Frankfurt a. M. 大學の Žižek 教授は、Schmollers Jahrbuch 本年二月號に一文を寄せて、「比較性なき統計的計數」を生ずる理由について注意すべき見解を發表してゐる。仍て其の所説の概略を紹介したいと思ふ。

二

細説に入るに先ち、統計的計數、統計學で用

ひる研究方法としての比較法、比較性なき統計的計數を生ずる理由等に關する教授の根本的意見と、略述して置きたい²⁾。

教授によれば、統計は人間社會の大量現象を數的に表章するものである。而して表章すること云つても、複雑極りなき社會大量現象をその儘模寫するのではなくて、學問的にも實際的にも重要な分類を施すことに依て、その本質を摘出するのである。その手續として、先づ大量觀察を行ふ。大量觀察とは何ぞやと云ふに、一言にして盡せば、大量現象の單位を定案により洩なく數へ上げ、各單位の有する特徴を觀察録取することに他ならぬ。次に大量觀察によつて得たる結果を、各種特徴の差異又は多少を標準として分類する。以上二段の手續を施して後得られる計數が所謂統計的計數である。故に、統計的計數は調査單位及び調査特徴に付する意義如何によつて、換言すれば調査單位及び調査特徴なる概念によつて、定まるのであつて、決して大量現象を如實に反映するものではない。

1) 財部博士、社會統計論綱三九〇頁。
2) Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung u. Volkswirtschaft im Deutschen Reiche, 51. Jahrg. 1. Heft, S. 29-48.
3) 主として、Žižek, Fünf Hauptprobleme der statistischen Methodenlehre, 1922. による。

比較は「統計學の心髓」(Der Vergleich ist die Seele der Statistik) といふ程、重要な研究方法である。この方法によつて、社會大量現象間に存在する常例及び因果關係を明にし得る場合が極めて多い。併しながら、「比較によつて常例及び因果關係を明にする」と云ふのは、實は不正確な表現であつて、正しくは「大量現象を代表する統計的計數を比較し、以て大量現象そのものゝ間に存在する常例及び因果關係を明にする」と云はねばならぬ。

右に述べた二個の事情——統計的計數は社會大量現象を如實に反映しないこと、及び、比較法は統計的計數を比較することによつて大量現象そのものゝ間に存在する常例及び因果關係を明にせんとするものなること——から、統計的計數を比較しても何等の結論を導き得ない場合、即ち比較性なき統計的計數を生ずるのである。

三

教授は以上の如き見解の下に、比較性なき統

計的計數を生ずる原因六個を擧げてゐる。

(一) 調査の正確度の相違

従前に比して近時の統計では精神病患者癡病者が多數となつてゐるのであるが、この種の病氣が近來特に多數となつた譯ではなく、調査が完全となつた爲め、かゝる結果を生じたものと解せられてゐる。故に之に關する統計的計數を比較しても何等結論を導出し得ないのである。かくの如く調査の正確度に相違のあることが比較し得ない統計的計數を生じる第一の原因である。

統計がその正確度を加へ、事實の眞の變化又は差異をより完全に表章することは、實に可能事なるのみならず、實にその目標とすべき理想である。しかも比較を主にして考へるときは、かゝる改善すら行はれない方が宜い。蓋し、統計的計數の正確度は假令小なりとしても、事實と隔る程度が等しいとすれば、事實の變化又は差異を正しく示し得るからである。

(二) 比較すべき統計的計數の方法論的 (若くは

概念的) 差異

方法論的に見て同種の統計的計數のみが比較性を有する。而して、一計數の方法論的性質は、その作成——調査と之に續く整理編成——の際基礎とした概念により決定せられる。然るに實際を顧みれば、同一現象を對象とする統計調査であつても、その調査單位、調査特徴、或は分類標準に附する意義は必ずしも同一でない。これ比較性なき統計的計數を生ずる第二因である。

この原因は第二次統計には殊に多く現れる。所得税法の改正は所得統計の比較性を害し、刑罰法規の變更は犯罪統計のそれを傷けるのである。

(三) 一定の比較標準

比較性なき統計的計數を生ずる第三因は一定の比較標準である。例へば都鄙別婚姻率の研究を試みる際、婚姻數の總人口に對する比率を採つて比較標準とすれば、何等結論に到達しない。何となれば、人口の年齢別構成は都鄙によ

り著しく相違して居り、その結果、婚姻能力ある男女數は必ずしも總人口に比例しないからである。かゝる結果を避ける爲めには、種々の比較標準中最も適當なもの（上の例に於ては婚姻能力ある男女數の如き）を選択しなければならぬ。他の標準と云はすして最適當の標準と云ふのは、同一現象の比較に當り標準たるべき事項が數多併存し、標準の異なるに従つて結論も相違する場合が、屢々現れるのであるが、諸種の標準中には自ら優劣の別があつて、之が評價は必ずしも困難でないからである。

(四) 一定の因果的要素を摘出し得ないこと

比較法を用ひて、常例を指摘し因果關係を究明せんが爲めには、其の因果的要素を遊離せしめること、換言すれば、檢差法によるもその因果關係に於てのみ異なる比較大量を區別一括すること、が必要である。然るに此の手續を施し得ない場合は稀でない。これ比較性なき統計的計數を生ずる第四の原因である。

例へば職業別死亡率間に著しい相違を認め得

るからと云つて、その原因は職業の相違にありとは斷定し得ない。其の故は、職業により従業者の性別年齢別構成が異なり、福祉程度に差があり、本來の體質に強弱の區別があつて、何れも死亡率に影響を及ぼす可能性を有してゐるから、これらの要素を消去した上でなければ、職業の差異を以て死亡率相違の原因とは見做し得ないのである。

(一より四)に至る四種は、教授が既にその著述“Fünf Hauptprobleme der statistischen Methodenlehre”中の一節「統計的比較性」に掲げた所であつて、今次の論文に於ては同一要旨を反覆したに止る。

四

反之、以下の二原因は新に追加したものである。

(五) 一般的原因の存在

道德統計より一例を採る。男の犯罪頻繁率は女のその約五倍に達してゐる。併しなから、この事實を基礎にして、男の犯罪を敢てする傾向は女の五倍に上り、男は道德的資質に於てそれだけ女に劣るものとは斷じ得ない。その理由

は、男は女よりも多く外部に出て活動する結果誘惑せられる機會の多いこと、家族扶養の責任大なること、ある種の犯罪は女に之を犯す能力なきこと等、種々の原因が相合して一般的原因を組成し、道德的資質の相違はかゝる一般的原因の單なる一因子に過ぎないと云ふ事である。

他に生産調査に關する例を採る。絶對的生产額から、時間當り生産額を算出し、之が比較によつて労働者の能率を秤量することは、普通に行はれる方法である。併し、時間當り生産額を決定するのは、労働者の能率以外に工場機械の設備原料の精粗善惡等種々の因素より成る一般的原因であるから、かゝる秤量は明に不當である。

更に一九二四年一月中にルール炭坑に發生した災害數は、前年のそれに比して著しく多數であつた。一部の論者は之が原因を勞動時間の延長に歸した。けれども一九二三年即ち消極的抵抗の行はれた際には、地下労働が殆んどなかつたし、消極的抵抗の際虐使せられた機械設備が翌年に至つて漸く惡影響を及ぼした。始めたことも見得るから、兩者を直ちに比較するのは無意義である。

こゝに於て比較性なき統計的計數を生ずる第五因として、一般的原因の存在を數へねばならぬ。

(六)統計に過大なる能力を期待すること

一九二六年維納に開催せられた社會政策學會の席上問題となつた事項であるが、各國の國富及び國民所得に關する計數には相互比較し得ないものが甚だ多い。何となれば、國によつて所得の算定方法が異なるのみならず、自然的及び經濟的環境が甚だしく相違してゐるからである。例へば伊太利に於ては太陽が暖氣其の他種々の效用を得るに反し、北歐諸國に於てはかかる效用を得るに相當の出費を必要とする。故に北歐諸國のある程度の財産は伊太利の無一物と匹敵するのである。

他に似た例を求むれば、歐洲諸都府の馬車及び市街鐵道に關する統計を作成する際、畫舫を唯一の交通機關とするベニスを如何に取扱ふべきや、國稅負擔の地方別研究に當つて、地方稅公共組合寺院の課徵金を如何にすべきや等、隨所に存在する。

以上の例を考慮するとき、比較性なき統計

的計數を生ずる第六因として、統計的計數或は大量現象そのものとは何等直接關係を有しない外的環境を算へねばならぬこととなる。然らば何故外的環境が計數に影響するか、又比較を阻碍するか。教授はその理由を次の如く説明する。此の種の場合研究者の問題とする所は、統計的計數に表章せられた事實のみに止らずして、それ以外に外的環境に屬する事項にも及ぶ。例へば國富又は國民所得の研究に於ては國民需要充足の可能性を問題とし、馬車及び市街鐵道の統計に於ては市内の交通機關を問題とし、國稅統計に於ては住民の財政的負擔を明にせんとするが如き、之である。故に第六因は、正しくは、統計的計數に、その常例の指摘及び因果關係の究明の手段として有する以上の能力を期待すること、と云はねばならぬ。

以上 Niels 教授の「比較性なき統計的計數」を生ずる原因に關する見解を略述したのであるが、教授は近く比較法に關する研究を一括して發表すると約してゐる。その實現の一日も早からんことを鶴首して待つ次第である。

正 誤

第二十四卷第四號に掲載の末廣博士の時論の中に於て第八九頁の(英米日佛伊五國主力艦の勢力比率を五、五、三、一・七五、一・七五とす)を削除す